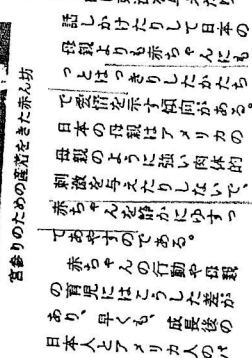


日本の中産階級の母親は今日ではほとんど核世帯、すなわち自分の両親や夫の両親からわかれ住んでいるので日本の伝統的な育児について知らないことが多い。また、だれも知っていたとしてもその伝統的な育児は古くさいとか封建的だとして、しりぞけてしまっただけというところ。その結果、育児法についての出版物も少ない産業となりつつある。専門家が、自分こそが最も近代的で科学的だと主張して、従来の母親に相反した方法をすすめているのである。母親が求められている専門家のアドバイスは、新聞、週刊誌、月刊誌、ラジオ、テレビ番組のようスコムを通じて流されている。専門的なアドバイスがそこそこにあふれているので日本中、いはば隣近所という限られた地域の中でも、いろいろな違った育児方法がみられる。たとえば母親も人々を養育の方がよいという人、赤ちゃんをベビーカーに入れるのを好む人、または母乳を主張する人に対する人などがある。ボーゲルが指摘しているように、いろいろなバラ

エナリがあるにもかかわらず、それでもなおかなりはつきりした日本式育児体系とよべるようなものがみられ、このような日本式育児はアメリカの育児法とかなりかけ離れている。そして、それが日本人のパーソナリティー形成の基盤をなしている点である。パーソナリティーの複雑な構造の中からここでは対人関係の中での感情の処理方法を取り出し分析してみよう。というのは、それが日本人のパーソナリティーの重要な構造要素となっているからである。ここでいう感情とは、対人関係の中でのごくあつちの自分の感情や気持をさしている。ここで問題にするのは、他人にたいして怒りや恐れのような適した感情をさす場合ではなく、他人にたいして自分の気持がうまく処理していく日常の感情である。情緒的連性は、母乳のしかたや哺乳のしかただけによるのではなく、親子関係の行動パターンの積み重ねを通じて築き立てられていくものであるという立場に立つ。そして、このことが感情を処理するときのひとつの処理のしかたをもつていっている点である。このために二、三の習慣を集中的に検討するより、むしろ幼児期からのいろいろな育児習慣を模索することにした。

赤ちゃんと赤ちゃんの行動を録計してゐることにする。わすか生後数カ月の赤  
 ちゃんとライオンズ・タインは日本とアメリカにおける中間階級の母子の間での相互作用  
 を比較研究した (Caudill and Weinstein, 1969)。その結果誕生後三、四カ月ですでに日本とアメ  
 リカの赤ちゃんは異なる行動をする。またそれぞれの文化では、母親と赤ちゃんの間にか  
 らい違つた相互作用があることが明らかにされた。

この研究の中でもとりわけ顯著なものは、アメリカの赤ちゃんと日本人の赤ちゃんとを比較して、日本人の赤ちゃんとが、母に著味のある話しかけをすることが統計的に多いということである。一方、日本の赤ちゃんとアメリカの赤ちゃんとを比較して、アメリカの赤ちゃんとが、母に著味のある話しかけをすることが統計的に多いということである。一方、日本の赤ちゃんとアメリカの母親は赤ちゃんとを軽く叩いたり、むすかつたりして母親になだめられる傾向がある。アメリカの母親は赤ちゃんとを強く叩いたり、むすかつたりして母親になだめられる傾向がある。



イノナリチーの差はすでにこの頃から示されている。たとえばアメリカの赤ちゃんとはいくらもう一人にしておかれるので、自分一人で寝るの志望をはからなければならぬことを自然に身につけるのである。これにたいして日本の赤ちゃんは母親に頼って情緒を安定せよとする。この差については後でもっと詳しく述べることにする。もうひとつの大きな差はアメリカで行なわれた調査によると、母と子の相互作用は言語回廊と子どもの身体的活動を刺激する傾向があるということである。それにしたいて、日本における母と子の相互作用は活動の点でも言葉の点でもむしろ少なくて、それにおわりに赤ちゃんをだめだめたり、あやしたりする場合が多い。くりかえせば、このような差は成長後のアメリカ人と日本人のパーソナリティーの差を生み出すのである。つまりアメリカ人は日本人よりもずっと言語能力を重視している。

理想的な日本人像は、それ自身が時代とともに変化してはいるものの無口な人で自分からどうも言いたいことを事言や約言するよりもむしろ行為を通じて表わし、不平をいわず耐えしのぶタイプの人である。要するに日本人の性格にみられるこの非言語的なものの強調は幼児期のごく初期から始まっているように思われる。赤ちゃんを膝にのせ、あまり話しかけもせず、静かに抱っこしてあやしている日本の母親の姿は、母親と親しい人と一緒にいて直接身体的接触を保つことが愛情を安定させるために大切であると思つて日本人の考え方や関係にあると思われる。

願したりひそりにして  
 おくことはあまりない

大部分が母子関係の中に発達していくのである。日本では母親の愛情を抑制したり、母子関係を不睦をいだかせたりするような行為は、できるだけひかえられている。すなわち、(1) しつけのために罰を与えたり、(2) 子どもを一人ぼっちにしたり、また母親から他人に子どもをまかせたりすることによってあるなどは許されるのである。それにくらべて、アメリカの育児ではこれらをお互いの用いているので子どもにも不睦をうつすのは好んでゐる。アメリカの子どもにとって親は不睦な存在であらう。その意味でアメリカの子どもは結婚の予定を親にあきり頼らないでもよいように心から希望し、自分自身の情緒は自分の問題として処理するのである。これらのことをよく見て日本人の育児様式をよまうことにしよう。アメリカの育児と外面のまじは内面的な比較をする。によって差に達したような。日本とアメリカの教育的な面が明らかにされるだろう。

アメリカにおけるベンジャミン・スポンク博士のような名実を日本で博している小児科医松田功雄博士は、何世紀にもわたる経験にもとづいて発達した、伝授された日本の育児法を合理的に理解し、その本質を捉え、現代に合った育児法を提唱している。

「不、大、一、七、二、三」はよれば赤ちやんが泣いたときには、たとえ露城でも発見すればよくと知っている。松田氏は、もちろん時間をきめて殺戮するやりかたにたいして、怒ちるときと身支度を整へて近日本の習俗を模倣しているのである。時間に促つて殺戮するやりかたは近代初期に日本に輸入されたが最近にいたるまで普及しなかつた。時間に促つて行なう殺戮では、赤ちんはおかぬをさすが近き、空襲から生じる情熱的抗議を赤ちん自身で何とて処理せよとするのである。アメリカの赤ちんは、頭蓋の中へ二人のおかしをいれ、一人は一人の

安と戦うことを断る必要はない。アメリカ人は自分の情権の問題を自分で処理する能力をもつ。この情権的独立が個人主義イデオロギイに象徴されている社会での独立の心理的な支えとして働いていることに注意する必要がある。他方、欲しがる時に与える自律程度は反対の効果となわね情権的独立とながすのではなくて、ますます母親にたいして情権的依存を高めるようにしてはいていこうといえよう。

就寢 日本では子どもがねるとともに、同じような事やかしな行なわれている。アメリカでは子どもは比較的まとった時間に就寝したり寢寝をしだりすることになっている。これはたいがいの場合、強制的なもので、子どもはしばしば泣いて反抗するのである。こうした場合、アメリカの子どもは早くから離れ、手紙のペーパーベッドに一人にしておかれるが、子どもはこのようなまとたに早くと寝てくことを希望するのである。日本では、通常子どもは寢寝や就寝についてのきまつた時間割はない。もしも一晩の時間割があるにしても、それは親よりむしろ子どもがつくつたものである場合が多く、そのような場合ですら十分に守られていないことが多い。たとえば夜、子どもは寝られておわなくなるとまでであるならば寝てまで起していだがる。子どもを寢床につれていても、通常母親は子どもがねむつてしまふまで、静かに寝ている。これは小児科医松田氏の推める意見でもある（松田「一乳大置屋」九六—九七—）。そのとき、乳をすくまねれることも多い。また親が泣きまおけることも多い。外ならぬが、お母さんの親は子どものおさへ間は同じふんどにねたり、夜寝後にも隣あつたらとべにねるのが普通である。子どもとして日本の赤ちゃんや子どもは一人として不安を比較的に経験しない。日本の母親は情緒を獨り子施であり、アメリカの子どもは

母親の手で一人にされることがないので、母親が精神的不安の原因となることは少ないのである。

ベビーシッター 情緒を処理するのと同じパターンを遂すもうひとつの例はベビーシッターである。アメリカの親は当然のこととしてごく幼い頃から、子どもに一人でまどく他人であるベビーシッターと子どもに留守番をさせる。まどく他人であらうとなかちうとベビーシッターは、子どもにとつて親と同じ意味で同じ程度に情緒的に安定的な存在ではないのである。アメリカの子どもにとつてベビーシッターと残されることは辛い経験であり、泣いたりときには無服をおこなうこともある。しかし、ともかく子どもはこの状態に順応することを学び、未だ母の源である親が一時的にいなくなり、侵入してきた他人とまどくつていくことを学ぶのである。

このようなベビーシッターは日本ではほとんどない。結婚していても子どものない女性は、しばしば外出して家を留守にするがひとたび子どもが生まれると家庭に縛りつけられ、その生活はアメリカの母親の生活よりもずっと子どもを中心に展開することになる。もしも母親が姉や妹などと一緒に住んでいれば、子どもはそのような親戚の人や留守番をさせられることがある。しかし、日本の母親は他人または近所の人に子どもをあずけようなどとは考えずともみない。こうして子どもは親から離れる不安を体験しなくてはすむ、その結果親を肯定的感情、すなわち依存の態度でとらえやすくなるのである。

殊はストレスを少なくする。一方、相対的にいってアメリカの子どもの生じやすい状態からの否定的感情にあつては少ない。これに反して、アメリカの子どもの母親から肯定的感情の露出を得ているので、母親にたつと二律背反的な感情をもつことになるのである。

小学生の子どもの持つ日本の母親は、いかに子どもを養育して子どもを育てていくことを図かな  
いとは、ともに学校の先生に依頼していくように依頼する。母親が先生の関心来し、子  
子を注意を怠らなくするように頼む。先生は子どもに注意を怠らず母親と取り合ふのは自分の道  
徳の例えである。このように依頼するのは、母親が教師児童や親などから与えて子どもを育てる  
手段的な道具を認めるためである。また、このような依頼をするのは先生といふものは子ども  
から見て、例外であり、比較的遠い存在なので、感情面からいえば先生と生徒という関係であ  
ることに注意が必要であることである。そして同時に先生は生徒に対して権威的な地位にある  
ので、生徒は先生の命令に従うことになる。

魔などが出てきてということをお聞きできない子をもつとか、神技のはながまたなごかう (Lanham  
 1956, p. 576)。<sup>10</sup> もうひとつのよく使われる言は、恥ずかしいということである。